

企業社会の構造と転換（その2）

—「新日本的経営」とその破綻、展望—

* 浅野慎一『新版 現代資本社会の構造と転換』「第5章 企業社会の構造と転換」大学教育出版

I. 「日本型企业社会」の崩壊

「日本型企业社会」：1990年代、最終的に行き詰まり。「失われた20年（30年）」の閉塞状況。

輸出力・国際競争力の喪失。

多国籍企業化・海外現地生産化。（国内産業の空洞化、経営・雇用の悪化）。

グローバルなサプライチェーンの一環としての事業展開。（中国等への依存、限定的分野、縮小再生産）。

経済成長戦略の喪失、保守的・退嬰的な経営方針。（企業内部留保金の蓄積）。

労働組合・労働者：平均実質賃金の下落に不満。BUT 格的闘争・組織的運動を展開せず。

BUT & SO 「日本型企业社会」（＝疑似的「共同体」）の維持は困難。

「日本型企业社会」の再編・強化で、リストラ・雇用流動化（企業「共同体」の掘り崩し）：

「蛸が自分の足を食って生き延びようとする」ような矛盾。

& ①高度経済成長期・バブル期に大量採用された若年層：1990年代以降、中高年に。

企業：年功序列的な賃金上昇、昇進ポストは保証不可能。

②労働者の労働意欲・やりがい感：急速に衰退。

生産性・労働意欲：OECD諸国で最低ランク。

十分な配慮・教育のないIT技術の導入：IT機器の動き・速度に合わせ補完する単調反復労働。

IT機器：高額、技術革新→短い償却期間。∴ 長時間稼働・夜勤等。

職場集団の流動化・人員削減→人間関係の希薄化。「小集団活動（QC・ZD）」も停止。

③都市・労働者家庭出身の若年労働者。（農村は過疎化）。

個人的自己実現・やりがいを重視。（≠「勤勉と忍耐」、「『和』の精神」）。

④企業別労働組合の空洞化。

労資協調の労働組合：存在意義・役割は希薄。

組合員（＝正規雇用労働者）の削減、非正規雇用労働者の増加。

労働組合の組織率・影響力は地盤沈下。

組合員に無関心層が増加。職場レベルの活動も形骸化。

「日本型企业社会」→「新日本的経営」。

II. 「新日本的経営」の推進

①「分社」化。

本社（財務・人事の管理中枢機能） & 子会社・社内ベンチャー（実績主義、スクラップ & ビルド）

1997年、独占禁止法が改正。持株会社解禁。

企業の興廃が急増。

②能力主義・業績主義的な賃金体系（年俸制等）。

賃金基準の客観化・数値化。＝個別の質的事情・理由は無視。

賃金＝仕事の業績への対価。＝「生活の論理」や「生活の必要」は無視。

ベースアップ・固定給の脆弱化。

③正規雇用の縮小、非正規期雇用（派遣・パート・アルバイトなど）の急増。

企業の枠を超えた移動、雇用流動化。途中転職。

人材派遣・人材仲介業者が重要な役割。労働者派遣法。

④勤務形態の多様化・柔軟化。（正規・非正規を問わず）。

労働基準法改正。「変型労働制」、「裁量労働制」、「短期雇用契約」。

*「労働・雇用の多様化・流動化」→労働者が多様な個性・属性に応じて意欲的に自分らしく主体的に選択。

「企業社会」からの「自立」。自立した個人として多様な働き方の選択。

企業への協調的姿勢は維持・確保。

ex) 1)「自分が所属する子会社の業績伸長に努め、そこで昇進・業績に応じた待遇を受け、同時により有望な事業分野・企業へのスカウトを期待して、不断の自己錬磨に取り組む」。

企業の枠を超えて通用する能力・公的資格（自己負担での英語外部試験・修士等）の取得。

2)「仕事以外に個性的な生きがい」を発見、企業に雇用・賃金面で「過大な期待」をしない。

性別・年齢・学歴・「能力」・価値志向等に応じた「日本的ワーク・シェアリング」「企業からの自立」。

⑤多国籍企業化・海外現地生産 + 外国人労働力（研修生・実習生・留学生等を含む）の活用。「国際化」。

「グローバル・スタンダード」の喧伝。

「国際化」→①～④の国内産業改革を推進。

Ⅲ. 「新日本的経営」の矛盾

BUT 「新日本的経営」：日本経済の発展戦略としては成功せず。「失われた20年（30年）」。

日本経済の相対的地位低下。日本の労働者の平均実質賃金：OECD諸国の中で希少な低下一途。

①「分社」化：経済停滞、経営戦略の欠如の中では、企業（製造業）のスクラップ・縮小再生産。

海外資本（特に中国資本）による買収、「買い叩き」。

東京（首都圏）一極集中化。（「本社」：東京、製造部門を担う「分社」：地方圏）。

地方圏での「産業空洞化」。

②能力主義・業績主義的な賃金体系 & ③非正規雇用の増加：

実質賃金の低下 & 「生活の論理・必要」を無視した賃金体系・雇用形態。

→「働いても生活できないワーキング・プア」の急増。

特に能力主義・業績主義の強化：博士の学位、高い英語能力等をもつ高学歴ワーキング・プア。

大学教員の過半数は非常勤講師。若手研究者の過半数は任期付研究員。

→日本の科学技術の衰退。（大学院博士課程進学者の減少、論文引用率の低下）

「日本にしか生産できない部品・素材の開発」???

③非正規雇用の増加 & ④勤務形態の多様化・柔軟化：

非正規雇用でも、正規雇用と同様に長時間・同一労働。格差・不平等が露呈・可視化。

望まざる非正規雇用 > ライフスタイルに応じた自己選択の非正規雇用。

企業の一方向的都合による「多様で柔軟な労働時間」。

「選択の余地のない労働強化・長時間労働」 or 「失業・雇止（解雇）」の二者択一。

日本の社会の変化

①「格差社会」化。非正規雇用の増加。

競争主義：「希望の光」 < 「絶望の影」。

韓国映画「パラサイト 半地下の家族」。

②同一職場社会の内部でも葛藤・不満の膨張。

③世代間対立。若年層の不満・不安。

④労働・雇用面での東京（首都圏）一極集中。地方圏の衰退。

自治体財政基盤、生活環境の格差拡大。

⑤外国人労働者（研修生・実習生・日系人その他）の増加。労働者の多民族化・多国籍化。

正規雇用：日本人、非正規雇用：外国人+日本人。

技能実習生等、劣悪な労働条件、差別・人権侵害。

外国人と同じ労働条件で働く日本人の非正規雇用労働者：「将来展望、夢の持ちにくさ」。

人事担当：「日本人の若者の派遣労働者より、外国人の派遣労働者の方がずっと勤勉」。

国籍・雇用形態の違いを越えた労働者としての交流・連帯：限定的。

日本社会に多重的・多元的な「分断」。雇用形態・世代・居住地・国籍。

不利な立場の人々：「希望の光」 < 「絶望の影」。

有利な立場の人々：脱落への恐怖・不安。目前の不利な立場の人々への気兼ね・葛藤。
ストレスフルな社会。自殺者の増加、犯罪の増加・治安の悪化。
他者への監視・告発・攻撃：社会正義であるかのような感性の増幅。寛容の喪失。
「生きづらさ」。孤立化。非婚化・少子化の進展、人口縮小。

⑥平均実質賃金低下 & 人口減少＝日本の国内市場・内需の縮小。

ローンも不可。消費・購買意欲の縮小。（←公的福祉・老後の年金が貧弱）。

輸出面で地位低下 & 日本国内の内需も縮小→「経済大国」からの落伍。

「日本を見捨てる」外国人労働者。

日本の低賃金、円安：外国資本（特に中国資本）による日本企業買収、日本人が外国に出稼ぎに。

IV. オルタナティブな企業社会・労働者の萌芽

①労働運動の活性化。

企業横断的・非正規雇用労働者の労働組合。職種別・地域別。

外国人労働者の加入。

「オレのダチに手を出すな、アタシのツレに手を出さないで」。

非常勤講師等の労働組合。

②階級意識の醸成。

非正規雇用を前提とした労働条件改善運動。

小林多喜二「蟹工船」のベストセラー化。

韓国映画「パラサイト 半地下の家族」の上映。

③地方圏への移住（特に大都市出身者による「Iターン」）

労働者協同組合（ワーカーズ・コープ）の台頭。

「人間の命と暮らし、人間らしい労働」。

子育て・介護福祉、若者・困窮者の支援、農林漁業、過疎化した地域の活性化等。